
鉄棒行進

mimoz.k.withberry

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鉄棒行進

【ZPDF】

Z6937Y

【作者名】

mimonz.k.withberry

【あらすじ】

災害と恋愛のものがたり。

五月四日

今日も川原で落ち込んでいる。

学校の校庭のすぐ近くを、隣の大規模な総合公園の敷地との境目に
なる川が流れている。川は公園を一周していて、県最大の湖と海に
分かれる。水質は淡水。

数本の橋に囲まれた陸の孤島の様なその公園は学校の通学路にも指
定されていて、私も橋を渡つて公園を横切りまた橋を渡つて学校に
来ている。

青臭い雑草の上に座つて川を眺めながら、先生が背中を撫でてくれ
ている。

大丈夫。絶対に成功するから。自分の課題ときちんと向き合おう。
だって。

先生にこうして相談するようになつて一週間。

私は先生の期待を裏切り続いているのに。なんで私はダメなんだろ
う。

体育の授業。運動会の練習。

T字に並んだ鉄棒を、右左、右左と交互に掴んで行進する。

音楽に合わせながら真っ直ぐ進んだり、くぐつて交差したり、後退

したり、止まつたり、また進んだり。

一歩づつは全て、鉄棒の幅に決められる。

古くからの伝統があり、毎年六年生がその演田をするのを、五年生以下は憧れの目で見る。

最後には拍手喝采のスタンディングオベーション。

六年生になる前、五年生の三月から半年間、練習と二つ訓練が始ま。

軍隊の様に指導を受ける。

他の授業では天使のように優しい先生方も、殴る蹴る怒鳴るは当たり前。竹刀や鞭の様なもので叩かれたりもする。

でも、この時ばかりはP.T.Aも口出ししない。

私達も栄光を目指して、その訓練を必死で受ける。

体育の授業は、五年生で取つて置いた半年分と六年生の一年分をこの半年に詰め込むので、ここにで体操着はボロボロになるらしい。

今日も落ち込みながら家に帰る。

帰つたらお母さんに演田の進行状況を聽かれて、お姉ちゃんの時はこうだった、ああだったと言われ、あなたも頑張るのよと励まされる。

五月八日

友達もそんな風に言われると、お昼休みの話題に上った。

五月三十一日

訓練が進むに連れてだんたんとエスカレートしていく先生方の暴行。演目の音楽やパターンは伝統の物を使うので、その頃にはもうお客様に見せられる様になつていないといけないらしい。

私達も努力して付いては行くものの、なかなか上手に出来ず校舎の最上階から先生が怒鳴る。

ラインが美しくない、リズムがあつてない、全体のバランスが良くない。

お前達に本当にできるのか！
出来ないなら演目変えるぞ！
出来るなら最初から真面目にやれ！

他校から新任で来た先生は、それまではまあまあと言つて怒鳴つたり暴行を仲裁するものの、この頃から他の先生と同様に罵倒と暴行を始める。

なんで出来ないんだ！
お前達はダメ人間だ！
人生の敗者だ！

でも、先生方も私達も目指す場所は一緒。

運動会の栄光。

先生方も私達の為にそうしてくれているのは分かっているから、付いていける。

内容によつては体育大学の付属中学にスカウトされたり、将来的に高校の入試にも有利に働いたり、県から表彰されたりもする。

その為に四年生くらいから転入してくる子も毎年十数人いる。逆に中学受験の為に電光していく友達も同じくらいいる。

先生方も、教育委員会か何か…よくわからないけど、良い事があるらしい。

私達の将来にも関わる重大儀式だから、頑張らなきや。

明日から月・水・金曜日の放課後も七時まで訓練する事になるから家族の人にきちんと伝える様にと、帰りのホームルームで言われた。その旨が書かれたお便りも配られた。

六月七日

始まる時には夜七時までと言つ事だつたけど、放課後訓練のある日は夜九時までは訓練。

さすがにPTAも抗議するかと思つたら、そんなに遅れているんですか?と演目の心配。

六月十五日

遅くまで居残つて自主トレも始まつた。

帰りが遅くなる日は公園を通るのが怖いので、同じ方向の友達と集団下校。

それでも怖い日は先生が公園の外までついてくれる。

六月一十三日

今日も川原で先生が背中を撫でてくれた。

私がきちんと交差出来なかつたから淳君が竹刀で一十分くらい暴行を受けた。

お昼休みに淳君に謝つた。淳君は、氣にするなよ。俺が上手く交差出来なかつたんだから。俺達、一緒に頑張ろつ。

私が悪いのに。なんで私はダメなんだろう。

先生は、大丈夫。みんなで乗り越えよう。もっと自分をしつかりと持つて責任感を負えば成長するんだから。ね。

夜から雨が降り始めた。

六月一十七日

雨は止まない。体育館でのトレーニングと行進練習。先生方は苛立つてゐる。私達も苛立つ。

六月三十日

先生雨でもいいです、外で練習させて下さい。

生徒会長が一声を擧げると、一気にみんなが職員室に抗議に押し寄せた。

先生はにこにこ笑いながらお前達は仕方がない奴らだなあと言いながら腰を上げてくれる。

私達は嬉しくってわあっと叫びながら走って校庭に出て行って鉄棒を設置する。

今日は夜十時まで訓練に夢中に励んだ。

さすがに遅くなってしまったので、公園を出る所まで先生が付いてきてくれた。

七月十日

雨だったけど気にせずに草原に座り込み、いつもの様に川原で慰められていると大きな地鳴りがした。

何が起こっているのかが分からなかつた。驚いて動けなくなつている私を抱き上げて、先生は校舎に向かつて走った。

酷い地震の様に地面が揺れて先生は何度も転んだ。私の腕を掴んで引き摺りまた転んで、でも手はずつと掴んでいて、また抱き上げて走つて何とか校舎に転がり込んだ。

しばらく保健室で身体を乾かし、擦り傷を治療してもらい、その間先生は何度も心配して保健室を覗きに来た。

大丈夫か？テレビで今速報やつてるんだけど、まだ原因がわからな
いみたいで：とにかくここに居ろよ、ここなら大丈夫だから。すぐ
戻つてくるから、ちょっと行ってくるね。

落ち着いた頃、先生に付き添われ職員室のテレビで速報を見た。

県海沖で地震が起こり、休火山だった山が地鳴りを起こし、湖に繋
がつているダムが決壊し、川が氾濫。

公園はほぼ壊滅。学校周辺に多大な浸水被害が出ているらしかった。
私の自宅前の道路が陥没している様子がテレビで流れた。

先生！電話！お母さんに、電話！

震えている私はボタンを押すことも出来なくて、電話番号も頭がぐ
ちゃぐちゃで分からなくなつて、先生が急いで調べてくれた。

自宅の電話は繋がらなかつた。緊急連絡先のお母さんの携帯電話も
繋がらなかつた。

先生は、回線が混雑しているだけだ。大丈夫だから、と言つて保健
室に連れていかれた。ベットに寝かされ、手を握つてくれた。

大丈夫、大丈夫だから。

私はそのまま眠ってしまった。眠る直前に、遠くで先生の声がした。
ちょっと行ってくるね。すぐ戻つてくるから…

田を覚ました時、田の前に先生がいた。

田、覚めたか？大丈夫か？ と、おでこを撫でた。

うん…時計を見ると夜の八時を過ぎていた。

先生、お母さんとお姉ちゃん大丈夫かなあ。

先生は笑顔でもちろん、と頷いた。ちょっと待つて。頭を撫でながらそう言つと出でていってしまった。

そつ聞えば何だか騒々しい。体育館の方からバタバタと音がするし廊下でも田中の学校よりも多くの人の声がする様だ。

緊急避難とかかな。

保健室のドアが勢いよく開く音。聞き覚えのある、お母さんの声。

お母さんは私を強く抱き締めて、良かつた、田が覚めたのね。今お祖母ちゃんを体育館に運んでいたの。

一緒にいられなくてごめんね。お姉ちゃんもお父さんも無事よ。

それだけで良かつた。

私はお母さんと一緒に先生にお辞儀をして家族の元に行つた。

次の日の朝、職員室から運ばれたテレビで被害状況が大体見えてきた。

幸いな事に死亡者一名、重傷者は数名程度で、軽傷者が私を含めて数十人、被害は大体が浸水で、そんなに酷い災害では無いらしい。

七月十三日

家族も私も家の事が気になつて仕方がなかつた。

まだ住めるのかな。家の前の道路が陥没していたから、お家傾いたりしてるのでかな。

大人達が日々に市長に訴えると、帰宅志願者は一時帰宅を許された。一家につき一一名までと制限がかかり、お母さんとお父さんがお家に帰つた。

通帳や現金、貴金属類はお母さんが避難する時に、棚ごとバッグに詰め込んで持つてきいたから、重要な物やすぐに取りに戻らなければならぬ物は特に無かつた。

何があるかと聽かれたので、一年生になる前のクリスマスに貰つた熊の縫いぐるみを頼んだ。

戻ってきたお母さんの手には縫いぐるみとお姉ちゃんの日記帳。家族の人に着替え。ペットボトルとタッパー。

お父さんも大きなリュックを抱えていた。

お父さんのデジタルカメラで、家の変わり果てた姿を撮影した。

二階の私とお姉ちゃんの部屋は、どうやら荒れているようだ。片付けに帰りたいなあ。

一階は窓ガラスが全て割れ、浸水した跡が残る。

なんかね、震災でお家に行けないと制限されていた間に強盗が入ったみたいなのよ。お隣もお向かいさんもそうだったみたい。酷い事する人がいるものね。家はみんなが無事に揃ってるし、通帳や保険証もあるからなんとか大丈夫そうね。でも本当に酷い事する人がいるものね。

明日香ちゃんのお家、被害にあったんだって。明日香ちゃんのお母さんが帰ってきた時に泣いてた。

七月十四日

校庭で先生に会った。夜、体育館が暑くて外に出た所でたまたま出会った。

どうした？元気か？

うん、大丈夫。先生のお家は大丈夫だったの？

お家か、この前帰ったよ。先生はマンションの三階だから、浸水とかなかつたよ。荒れてたけど住めない事はないかな。明日のお昼に片付けに帰るひつと思つてるよ。

そか。

今日は十五夜だなあ。満月だ。花火大会、中止になっちゃったな。

うん。

川原の方まで行かないか？

うん。先生、抱っこして。

甘えん坊だな。ほら、おいで。

お姫様だっこしてもらつた。先生が必死になつて私を校舎まで連れてつた時と同じようだ。

先生の腕と手の甲の擦り傷と、私の脇腹と肩と右のふくらはの擦り傷が合致した。

なんだか嬉しかつた。

校庭の中場まで行くと先生は止まつた。先生の胸に耳をくつづけて鼓動を聴くのに夢中だつた私は止まつた瞬間少し驚いて先生を見上げた。

先生は氾濫が收まりかけた川を見つめていた。川原は浸水して校庭の一部まではまだ水が漂つていた。

これ以上行くのは危険だな。

先生は私を下ろし、その場であぐらをかいた。

先生。まだ抱っこ。

先生は黙つて川を見つめていた。くつつけて鼓動を聴いていた。

私はその膝に座つてまた胸に耳を

七月十五日

各地で声が上がり始めた。

六年生の鉄棒行進の練習はしないのかといふ内容だった。正直、大人って何考えてるんだろうって思った。

緊急避難勧告解除。

学校は授業再開の為清掃に入った。

電気、水道、ガスは通っているらしい。

お家に帰つて部屋に入ると唖然とした。地震とかのレベルじゃない部屋の荒れかた。きっと強盗にあつたんだ。なくなつているものは特に無かつた。

お姉ちゃんのアクリル板で出来た半透明の貯金箱と下着が棚^ゴとなくなつていたみたい。しばらく私の下着で我慢するーつて。

私はお家に帰つちゃつたけど、食糧とか来るのかな?

ダイニングのテレビと冷蔵庫はコンセントが高い所にあつたから、被害を免れたらしい。

リビングのテレビは映らなかつた。テレビは低い位置にあつて、画面の三分の一くらいの所まで浸水したみたいだつた。

お家が壊れて住めない人達は地域のコミュニティーセンターに身を寄せた。

夜、先生から電話がきた。明日から学校を再開するとの事だった。

12時に校庭に集まるか？通学路が遮断されてしまっているから、登校出来ないなら連絡しなさい。な。

そう言われた。

持ち物はノートと筆記用具と体操着。それだけ。

七月十六日

町内のいつもの六年生全員で、一時間半以上掛けて登校した。

先生方は笑顔で迎えてくれた。

おう、元気か！

お家帰れた？

センターから通ってるの？ノートも筆記用具も学校のあるから大丈夫だからね。

校庭に集まつたのは六年生だけ。

少しゾッとした。

まさか運動会の為だけに学校再開だなんて、酷い。

スーパーもコンビニも開いてないし、食糧や物資の配給もまだ開始

されていない。

センターに散らばれば配給も僻地だと困難になつたり足りなくなつたりボランティアが必要になつたり、大変なんだつて社会の授業でやつたのに。

お家が全壊して帰る場所がない人もいるのに学校から締め出してセンターに移動させて。

鉄棒を組み立てて準備に入ると、いつもの罵声が飛ぶ。

戻ってきた気がして少し嬉しかった。

七月十九日
先生にぶたれた。

淳君と私の交差の所だけ、一時間居残りで練習した。

何度もぶたれた。

淳君もかなりぶたれてた。

私のせいだ。

お家に帰るともう夜の十一時になつていた。

お母さんから聴いたけど、やっぱり食糧の配給が来ないみたい。

センターに登録して、もういに行かなきゃいけないらしい。

お家は市街地から結構離れているから、登録したセンターにも配給が遅く届くらしい。

お母さんは食パンにカビが生えていたと怒っていた。

お祖母ちゃんはもう自分の部屋で寝たみたい。体育館から戻つてから、家族全員で一階の私とお姉ちゃんのお部屋で寝るのが決まりになっていた。

ほら、早くお風呂入っちゃいなさい。前よりも早く学校に行く準備して家を出なくちゃいけないんだから。

余震が一日に何度も襲う。怖い。

七月二十四日

開校から毎日、朝から夜まで訓練。五年生以下の学年の授業再開の目処はたっていない。六年生の普通の授業もまだ再開していない。

今日は放課後練習が無い。

校庭の片隅で泣きながら、また先生に背中を撫でもらっていた。

いつもには片道一時間半の帰り道を、先生に送つてもうつ。

その一時間半が特別な感じがして嬉しかった。私だけの先生。

訓練中の先生は嫌い。どの先生も怖いから嫌い。

でも今の先生は大好き。

夏の匂いと虫刺され。

明日は新しい生徒会長を決める予定だつたけど、どうなるのかな。

八月一日

今日から毎年恒例の六年生鉄棒合宿。

学校で全員で集団生活を送つて行進の協調性を高める為の、お姉ちゃんいわく地獄の合宿。

無いくつていう噂だつたけど、本当にただの噂だつたみたい。

本当は無い方が良かつた。

無駄に食糧の配給を学校に回してきらうのは今はいけない事だと思う。

今だつてお家に帰れない人だつているのに。うちだつて、ご飯を三食満足に食べてる訳じやない。

家族と離れるのも嫌だ。

大人は勝手だ。

今日から四泊五日。

一日に一回でいいから、先生は優しくしてくれるかな。

ちょっと怖い。

まだ余震が何度もある。怖い。

八月六日

合宿が終わってお家に帰ってきた。

合宿中は本当に毎日怖かった。先生方は無口だった。優しい所なんてまるで無かった。

朝五時に起きて直ぐに鉄棒の設置。

五時半からストレッチ。

六時にランニング。

六時半からトレーニング。

七時から五分間の朝食。

足が遅くてランニングが時間内に終わらなくてトレーニングに間に合わなかつた子は朝食抜き。

直ぐに十一時まで縦列で行進の訓練。

十二時から五分間昼食。

それからは音楽を掛けて訓練。

先生方の気が済まないと夜の一時まで訓練。

夜に十分間お風呂。

続いて五分間の夜食。

就寝。

帰ってきてお母さんに泣きついたら怒鳴られた。

素晴らしい経験をさせてもらつたのに何なんだつて。何度も蹴られ

た。

お姉ちゃんに無言で撫でられた。

頑張らなきや。

八月八日

また避難勧告が発令された。

休火山の地盤が変型した為、地下水が爆発的に上ってきて湖が満水状態に。

いつ鉄砲水が街を襲つてもおかしくないらしい。

山間の谷の街で、ダムみたいになっちゃひらじー。

街を出て避難しなければいけない。

この非常事態に街は学校の周りに囲いを作つてドーム型にする工事を早急に始めている。

シェルターにして住民を守るらしい。

私達は隣街の小学校の校庭を借りて、行進の練習。

端の方で他の学年も運動会の練習を始めた。

他の学年の子達は久しぶりの再開に歓喜していた。

何がしたいのかわからない。

八月十五日

避難勧告から一週間。他の学年の子達は普通に授業を受けて、放課後と体育の授業の時だけ運動会の練習に校庭に集まつてくる。

相変わらず六年生だけ校庭で行進の練習。

「すごい！頑張って！」と声援を送ってくれる。

どうだか。

授業、受けたいな。

そんな風に余所見してるから、私は怒鳴られて連帯責任だと全員で片足立ちで一時間立たされた。

三十七度の炎天下で、熱中症も続出した。

私はなんて出来ない子なんだろう。

終わつてから休憩をもらえた。

みんなに謝つた。土下座しながら全員に蹴られた。

その後、全員に頬をぶたれた。

淳君がよし、これで解決だ。みんなで頑張ろっ。と言つてくれた。みんなも賛同してくれた。

泣きながら「めんね。ごめんね。」と誰かみんなが頭を撫でてくれた。抱き締めてくれる子もいた。

その日は放課後、淳君と皿主トレーニング。

それが終わって避難所に戻るとお母さんが夕飯のお握りを手渡してくれた。

それ食べたら寝なさいね。明日も早いんでしょ。最近あなたイキイキしてるわね。運動会近いものね。頑張るのよー。

夜校庭に出るとまた先生に会った。

また夜更かしか?ダメじゃないか。ちょっと散歩でもするか。

先生と月明かりの中散歩した。

先生、下から見上げてぱりかりだけど、話すときはしゃがんで聞いてくれて、目線が合つ。

ドキドキした。

『街には一つのドームが完成していた。

街には一つのドームが完成していた。

八月二十七日
シェルター完成。

緊急避難はしたけど、浸水はまだしていなかった。でも、お家に帰ることは許されなかつた。

避難用のシェルターと学校のシェルター。二つの巨大な建物が、高台と川沿いの一ヶ所に設置されていた。

高台のシェルターに街のみんなが集まつた。六階建てで、最上階は半分が集会場になつてゐる。地区毎に分かれつて、場所も決められていた。

簡易的なドアや壁も作られていて、トイレやお風呂も清潔で広かつた。

まあまあ満足できる様だったので、安心した。

今日から入れる家庭は入つて良いらしい。住所も分かれつてゐるから、町内の仲良しの友達と一緒に探検した。

先生のお家にもお邪魔した。

私のお家は二階、先生は一階の階段の近く。

今度一人で行つてみよう。驚くかなあ。

八月三十日
学校に登校した。

明日からは他の学年の子達も登校する。

学校のドームはコンクリートの外壁に囲まれて、天窓が開くようになつてゐるそうです。

出入り口は外周に数カ所ある外階段を上つて行つて、四階くらいの所に一周大きな窓がついていて、その窓を引くと何処からでも入れるようになつていた。

内側も同じ作りになつていて、一周走れるよつた一メートルくらいのランニングスペースまで設けられていて、数カ所ある階段を降りて学校に登校する。

シェルターから学校まで、六年生の私達の足で三十五分くらいだった。

今日は音楽に合わせての訓練。それも朝からお昼すぎまでの四時間くらいだけだった。

校庭はアスファルトを敷いたらしく、人工芝を敷き詰めてあつた。

歩きやすかつた。

土じゃないから鉄棒を設置するのに少し時間が掛かつたけど、先生方は怒鳴りもせず黙つて見ていた。

多分、先生方も校庭が変わつてどんな風になるか試してたんだろうな。

夕飯の配給の時間に、先生のお家に行つてみた。

先生、ご飯食べよ。

おう、入れ入れ。ご家族の所じやなくていいのか？

先生は理科の先生なんだよって話してた。アナゴの研究をしてたんだって。

アナゴの研究をしてから小学校の先生になつたんだって。理科の先生なんだけど、学校では国語も算数も教えるのはどうして？

わかななかつたけど、先生が楽しそうに話してたから私も楽しくなつてずーっと聴いていた。

ちよつと難しいことを喋りすぎたかな。明日から全校授業再開だぞ、早く戻つて寝なさい。

おやすみなさい。

階段をそつと上つた。

九月四日

人一歩にも慣れて、音楽に合わせて通し練習が増えてきた。

先生方の罵声はやつぱり飛んでくるけど、暴力はあんまり振るわなくなってきたし、音楽を途中で止める事も少なくなってきた。

校舎の上から撮つた動画を見て研究して意見を言い合つて指摘しあつて、何度も間違える子には先生方より先に私達で罰を下された。

先生が持っていた竹刀も、隆司君と亮君が持つて訓練に参加した。

他の学年の子達も校庭の隅で運動会の練習をしていた。こちらをチラチラ見ながら、何かを話しているのが聴こえてきそうだ。

辛そーとか何とか言つてるのかなあ。でも音楽で最後まで通し終わると、周りから歓声が湧く。

でも一番出来ていなかつた子にはその場で罰を与えた。その時は誰も見ないふりをしていた。

もつすぐ本番だ。

整列、構え、前進、直進交差、前進、後退、停止、中間交差、停止、後退中間交差、停止、中間交差、前進、整列。

もうリズムも音楽も行進パートも身体に染み着いた。

後は目立たないように、行進するだけ。

九月八日

運動会まであと一週間。

重い責任がのし掛かってきていたみたいだ。

びひじょひ。練習も終盤を迎えて、最近は通し練習しかしていない。

先生の動画は見れば見るほどダメな子がわかつてくる。

亮君。いつも列を乱してる。ほら、こー。後退交差の所。いつもこ
こでもたつくでしょ？亮君、ちゃんと出来てない。

隆司君が竹刀で亮君の背中を叩いた。亮君はそのまま俯せに転んで、
みんなで手足を足で踏んで動けないようにして、それぞれ背中に踵
落としていった。

私達は亮君を仰向けに転がして顎を蹴り上げた。

もつそんな凡ミスしてる場合じゃないのに。亮君、偉そうに竹刀持
つて指導してたくせに。全然ダメ。

でも亮君一人のせいにしたら可哀想だったから、交差するパートナ
ーの美咲ちゃんも罰を貰える事にした。連帯責任。

美咲ちゃんはロッカーに押し込んで上からホースで水を二十分浴び
せた。それから一回出して、また同じ事を二階繰り返した。もう時
間がないんだから。身体で覚えてもらわなきゃ。

大ちゃんも一回田の中間交差の時に輪を乱してゐる。

大ちゃんは綱で足を縛つて教室の梁に吊るそつとしたけど、縛るのが弱かつたみたいで落ちてきた。

先生に縛り直してもらつて吊るしておいた。

放課後練習を九時までやつて、先生のお家に行つた。

先生は居なかつたけど、「」飯の配給を受け取つて待つていて。十時に帰つてきて少し話して外に散歩に出掛けた。

最近先生は抱っこしてくれないけど、手を繋いでくれる。

トクベツトクベツ。

私達だけの先生。

九月十日

自信無くなりそつ。練習すればするほどダメな所が見えてくる。

今日は面倒だつたから手足縛つて五人まとめて池に突き落とした。その後水で濡らした雑巾で鼻と口を一分間塞いだ。

その後五人は放つて置いて訓練に戻つた。

何度も通し練習をして、動画を見て、罰をとえて、また練習。

だんだん全員出来ていないと言つ声が上がつて来て、行進の左右の班に分かれて、パートナーに罰を与えあつた。

淳君に首を絞められて墮ちたら頬を殴られて醒めて、また絞められてを三回ぐらいい繰り返した。

私は淳君を窓際に逆立ちさせて箒で布団叩きみたいにした。窓が割れちゃつて、淳君血だらけになつた。

これでまた協調性が良くなるんだろうな。そうすればもっと良い行進が出来るハズだ。

整列、構え、前進、直進交差、前進、後退、停止、中間交差、停止、後退中間交差、停止、中間交差、前進、整列。

整列、構え、前進、直進交差、前進、後退、停止、中間交差、停止、後退中間交差、停止、中間交差、前進、整列。

整列、構え、前進、直進交差、前進、後退、停止、中間交差、停止、後退中間交差、停止、中間交差、前進、整列。

整列、構え、前進、直進交差、前進、後退、停止、中間交差、停止、後退中間交差、停止、中間交差、前進、整列。

今日は十一時まで訓練して帰つた。

九月十一日
苦しい。

九月十一日

運動会の総練習。

低学年の午前中の演目から一つずつ、観戦態度、待機から演目への移動、演目の仕上がり具合、終了後の移動。

全てに置いて、六年生は模範でなければならぬ。

先生方にすぐ怒られた。

総練習が終わってから校庭に並べた椅子に座られ、一時間怒鳴られ続けた。

観戦態度、声援の送り方、盛り上げ方、旗の振り方、笑顔、ハイタッチ。

今の私達には必要な練習だと思つたけど、そんな事を言つたり手を抜けば先生に連れてかかる。

こんな時に連れてがれて訓練が出来ないのは利益的じゃない、と淳君が耳打ちしてきた。

利益的ってどういう意味かよくわからなかつたけど、何と無くその練習に本気で取り組んでるんだつて姿勢を見せなきやいけないんだと思つて大声で声援の練習をした。

それが終わったのは夜の八時。

ドームには球場とかのライトみたいなのが設置されていたから、時

間なんて関係なかつた。

それから行進の訓練が始まつた。

久しぶりに先生方から指導を受けた。

友達が扱う竹刀よりもずっと痛く叩かれた。右足首が切れて腫れ上がりたけど、それよりも訓練の方がずっと大事だ。

パートナーの淳君とも協調性が取れて、失敗はしなくなつた。

やつと完成してきた。ここまでやつたんだから、先輩達やお姉ちゃんに負けない評価をされたい。

本番は、色々な人がくるらしい。

市町村合併で郡と言つ名前をつけられた伝統的な集落が集まつたこの田舎街に、県長、県議会議員、町長や町議会議員、各体育会系大学のスカウト、学区の高校の先生、学校のO.B. :

一昨日から食事を受け付けないくらい。

緊張で手が震えて足がしまづ。

夜の一時まで訓練を続けた。

九月十三日

三時前に避難用のシェルターに着いて解散した。

疲れてそのまま眠ってしまったんだけど、午前四時二十一分大きな地震が起こった。

お父さんとお母さんとお姉ちゃんとお祖母ちゃん。身を寄せあって地震が終わるのを待つた。

お父さんが一番上になつて毛布を被つて守つてくれた。

地震が終わるとじざわざわと声が聴こえてきて、ドアを開けると町内会長のおじさんが大丈夫かーと声を掛けってきた。

私は驚きと恐怖で動けなくなつて、手が震えて硬直状態。

医務室に抱き込まれてベッドに寝かされた。せんせい、せんせい、せんせい、と呟いていたみたいで、十分くらいで忙しい中先生が飛んできてくれた。

大丈夫か？

そう言つておでこを撫でると、すぐ戻るからーと言つて走つていつてしまつた。

身体が動かなかつたけど、お父さんに抱きこまれてお母さんに頭を撫でられてた。

どうだらう？

場内を走り回る音なのか、本当に鉄砲水がきた音なのか。振動も続いている。

ドアを開け放つように町内会長さんが言ひて回つてゐみたい。

ドドドドッという音と振動で廊下を転がつてくる人がいたり、館内放送が絶え間なく流れる。

浸水するはずのない床が薄ら湿つてゐるようだつた。少し異臭…汚臭がする…

ずっと揺れてて気持ち悪くなつておひつと吐いてトイレに行つてわかつた。

下水が逆流してきてるんだ。

元々水洗ではあつたけど、ショルターの外にミニショルターがあつてそれが下水を溜めるやつだつて言つてた。

クミトリシキの何とかのタイプだつて言つてたけど、そのミニショルターがおかしくなつちゃつたんだつて、トイレのところいたおばさんが言つてた。

その臭いだけで吐きそうだ。

とりあえず洗面台に顔を突つ込んで気分が何とか戻つたら顔を上げた。

鏡があるはずだと思ってたけど、私の知つてゐる私の顔じゃない。酷く頬は瘦けてクマができてやつれて、目は充血してゐし、唇も赤く腫れ上がつてゐる。

左の鼻の付け根が、この前蹴られた跡かな。カサブタで一応繋がつ

てるみたいだけど、鼻、おかしい。

とりあえず上水管は大丈夫みたいで、蛇口をひねつたら水が出てきた。キレイだつた。

多分大丈夫。

口をゆすいで戻つたらお祖母ちゃんが何かぶつぶつ呟いていた。

私は気持ち悪くて眠たくつてお母さんの膝枕で眠つた。

ガクガクと大きな振動で起きた。朝の10時だつた。

先生が私の意識確認をしにきてくれたらしい。私は今の顔が変なのがわかつてたから、見られるのが嫌で起き上がって髪を直す振りをして後ろを向いた。

恥ずかしい。私、鏡も全然見てなかつたんだ…。先生もこんな気持ち悪い子やだよな。それでもいつものように背中を撫でてくれて嬉しかつた。

眠つている間、多分三十分くらい。ずっと振動が続いていたらしい。

電波がだめになつちやつて、外部との交信も取れないらしい。

何とかコンピューターの何かが振動にやられたつて。先生が説明してくれたけど、よくわからなかつた。

午前中はそんな風によくわからない大人の言葉が飛んでて、外から見ているような感じだった。

振動にも慣れてきて、友達と集まって、詳しく分かる子に大人の話を訳してもらつた。

とりあえず、このシェルターは独立国家になつたんだよ。外部との連絡手段がなくなつたつて事は、町長が首相だよ。

そななのかなあ？僕らで企画して提案して実行できるんだよつて。

温泉掘るつー！

なんか盛り上がつちゃつた。

美咲ちゃんに顔の相談した。二人で鏡の前に並んだら、美咲ちゃんもやつれてるのに気付かなかつたつて。

美咲ちゃんは何も言わずにそのままお家に帰つていつた。後で覗いて見たら美咲ちゃんのお母さんの手鏡とにらめっこしてた。

午後、今田の運動会は無くなりました。と館内放送が流れた。

九月十四日

混乱はすつと絶え間なく続いてい。放送も流れるし、ガヤガヤ声もするし、ドドドドッという音と振動も続いてる。

十三日と十四日の境田も曖昧だった。

眠くなつて寝ても、ざわめきにすぐ起じられる。

お姉ちゃんのお化粧用の鏡をそつととつて覗くと、やっぱり見慣れない自分がいた。

こんなで先生は私の事トクベツに思つてくれるのかな。

はあ。

でも、落ち込んでる暇は無いらしい。

六年生が最上階に集められ、館内放送を流す。

校長先生がマイクで、学校に移つて運動会をしますつて発表した。

さすがに驚いた。みんなどよめいたけど、竹刀の音が響いて黙つた。

下の階とかから、ばんざーーー！とか、こうしゃーーー！とか聴こえてきた。

先生は続けて、今回は生徒達の安全に配慮して、六年生の鉄棒行進のみの運動会にする事を「承知下さる」と言つた。

下の階とかから、ばんざーーー！とか、こうしゃーーー！とか聴こえてきた。

最上階の窓から外を見ると、坂の下の方は湖みたいになつてた。

そこには幾つかボートが着けていて、用意している人が見えた。

遠くてよく見えないけど、学校のシェルターも見えた。あんなに小

さかつたつけ？階段も少なく見える。

最上階から順番にそのボートで人を運んで、また戻つて地区毎に運んでを繰り返すらしい。

30人乗りのボートは全部で15ヶ準備された。

六年生は一番最初に行つて、鉄棒の設置と最終練習。

早く行かなきや。私達は一斉に階段を掛け降りてボートに飛び乗つた。

学校までは15分。入り口の階段を二階まで上るハズが、踊り場にボートを着けたら一つ踊り場を登るだけで入口に着いた。

三時間程で全町民が学校に集まれるらしい。

それまでに練習だ。

校庭は人間の上に薄ら水が染みているみたいだ。

下はコンクリートのハズだけど、外は一階まで浸水してゐるんだから、仕方ないのかな。

設置が終わり、行進の練習に入る。

少しづつ校庭や、校舎の窓、周りのランニングスペースに観客が増えてきた。

緊張感がどんどん増殖して、押し潰されそう。

何もしてないのに涙が出てきやつ。

最後まで怒鳴られて殴られて私は足を引きずらないように平気なふりをした。

みんなも口や耳や色々な所から血が出てて酷い怪我だつた。血だらけで体操着はボロボロ。

もうすぐ終わるんだ。

その時、大きな振動に身体を取られ、天井がどこかわからなくなつた。

ドドドドッという大きな音が響いて、同じく振動が続いた。

立つていられない程の地震で、窓の外に大きく波打つ影が見えた。

私達は長時間の練習も振動にも慣れてしまつていて、当たり前に二、三時間を訓練に費やしていた。

強盗防止に移動間の町民の行動は制限され、全町民が学校のシェルターに移動する事になつていた。

だんだんとシェルターはどこも動けない程の超満員に。

本来は低学年の子達が待機するハズの所まで人の塊になつた。

知らない間に時間は刻々と過ぎ、最後のボートがシェルターを出発したと放送が流れた直後の事だった。

いよいよ、最後のハジマリダ。と思つたから覚えてる。

大幅な縦揺れと悲鳴の中、先生が駆け寄つて来てくれた。私は倒れ込むように先生に飛び付いた。

先生は私を抱き上げたけど、振動で色々な方向にひっくり返りながら校舎の方に連れて行かれた。

お祭りに来る屋台の、バルーンのパンダの中をジャンプしているみたいだった。

階段でも転んだり打つたりしながら、三階の端っこの社会科室に転がり込んだ。

ダンシヒドアを締めて窓から校庭をみると、揺れは収まっているようだった。

大きく波打つ黒い影が見える。

せんせ、このまま運動会中止にならないかなあ。中止になつたらここに一緒にいてくれる？

ああ、いいよ。腕大丈夫か？さつときせんに擦つただろ。

そつと言えば最近身長が伸びたかもしれない。首を乗せられるくらいの高さだった地図の棚、もう余裕で一番上の引き出し覗けるくらいになつてゐる。

体重は体重計がないからわからぬいけど、身体つきは変わつたと思う。

先生、わかってるのかな？

そうだ。

今度下着買つ時はお姉ちゃんと一緒のワイヤーが入つたやつにしよう。地震の前に見たお姉ちゃんが新しいのだって見せてくれた、水玉の可愛いプリントのやつとかあ、でも可愛いレースの付いたのもいいなあ。

あゆみちゃん、ワイヤーが入ったブラ着けてるって言つてた。どん
なのがいいか相談しようかな。

：

先生、うつむいた顔の鼻先がかっこいい。

そう言えば、私二ヶ用くらい生理来てない。

でもみんなそんな事言つてた。何人か病院にも行つてて、初潮すぐ
で不順になつているんでしょうって言われたつて。

同じかな。

なんか、先生見てたらドキドキする。

手、触られるの恥ずかしい。

ローンと校内放送の音が鳴る。町長さんの声だ。喋り方がちょっと
独特で怖いけど優しくてすぐわかる。

最終のボートは桜井三丁目六から十九番までと四丁目の方々を乗せ
ておりました。ボートは先程の地震で大波がきて、一度波に飲まれ
ましたが発見され、居住シェルターサイドに着岸されています。

ローンとまた鳴つた。

窓越しに大きく波打つ黒い影が見えた。

ざわざわと人の喋る声が聽こえた。学校の周りと校庭、校舎も一階

に。スシヅメジョウタイに人が立っている。

しばらく先生と冬の話をしてた。六年生はスキー授業がないから、今年雪が降つたら、山を越えた隣の街のスキー場に連れてつてもらう約束をした。

靴が窮屈になつてきたから、スキー一式買い換えたいな。お姉ちゃんのお古じやなくて可愛いやつ買つてもらおう。

また、ローンと放送の音がした。

訓練の時の、低いトーンの鈴木先生の声だった。

六年生、鉄棒行進の準備をして下さい。

ローン。

私達は無言で教室を出て校庭に向かつた。

先生に背中を押され整列した六年生の中に入つていつて、位置に着いた。

六年生一同、用意！！

ピッ。ピッピッピッ。ピッ。

心臓が止まりそう。

唾を飲み込む。

賑やかなファンファーレ。

運動会開会の音楽に続いて、最大音量で、音楽が流れ出す。

田を見開いて顎を引き、歩き出す。

鼓動が早過ぎて田の前が真っ白になった。でも、身体は音楽に合わせて訓練の成果を出していたようだ。

一度田の前進が始まつた直後。

いきなり、バリバリバリッという大きな音が響き、水が流れ込んできた。

ちょうど見える位置だった。シェルターの出入口になつてゐる二階の窓。

校門から見て左手の校庭の物置小屋の上から、弾けたようにガラスが割れて波がそのまま流れ込んで、数人の人を校庭の方に水と一緒に運んできた。

音楽も、私達も止まらない。

訓練の価値をみんなに認めてもらひつ為に。止まらない。

どんどん校庭は浸水してきた。私達は鉄棒に沿つて行進している、と言つよりも鉄棒に掴まつている形になつてきた。

ここで失敗なんてしない。鉄棒を握る手に力が籠る。

歓声がどんどん大きく激しくなつてきた。

観客は興奮からかどんどん押し迫つてきて、歓声で鼓膜が破れそつなくらい近付いてきた。

口から溢れそくながらのヨダレを飲み込む。音が遠く聽こえる。
くらくらする。

中間交差から停止した時には腰まで水に浸かりシャワーのように頭から水を被つていた。

シャワーの中に混ざり込んでいたガラス片が左耳のすぐ脇をかすめた。

校舎の音楽室側のガラスをボートが突き破つて侵入してきた。歓声と悲鳴が混ざり大混乱している。

淳君との最後の後退交差。いつもここで引っ掛けつてた。今日は完璧に上手く行つた。

嬉しくて淳君を見たら田を見開いて、瞬きもせずに真っ直ぐ前を向いていた。すぐ私も向き直した。

最後の停止、歓声は最高潮に。

フィナーレの音楽。シンバルの音が波のよみに響く。それに合わせて浸水も進む。

音楽に合わせてどんどん列が出来ていく。最後のシンバル。

ババババン！！

酷い歓声と悲鳴と波の音が響く。

わあああああつ。

すごい達成感だつた。

鼓動が早くなつて、涙が溢れてきた。
なつて、身体が震えて少し漏らした。
トリハダがたつて背筋が寒く

みんなで抱き合つてはしゃいだ。漏りしちゃつたけど、みんな水浸しだつたから恥ずかしくなかつた。

みんな顔がやつれて酷かった。よく見ると身体つきも、みんな私みたいに変わってる事にも気付いた。背が伸びたり、少し太った子やすごく痩せた子が居たりした。

足がガクガクしてみんな崩れるように波に身を任せた。

光が見えたと思つたら先生だ。

先生が何か叫びながら手を出してきた。何か言つてゐる。何? なに?

せんせーおわったよーねーみてたー?きれーだつた?ちゃんどでき
てたでしょー?ねー?すてきだつたでしょ?

せんせい

うで、そんなにひつぱつたらぬぢぢやうよ。

ガバつて波がきて、先生はどうかにいつちゃつた。

空が見えた。

ハツとした。

シェルターから流れ出たんだ。

辺りは暗くて周りには色んなガレキが浮かんでる。

どうからばんぞーい！ばんぞーい！ばんぞーい！ばんぞーい！ばんぞーい！ばんぞーい！ばんぞーい！ばんぞーい！ばんぞーい！つて聽こえた。

学校のシェルターが見えた。

光が見えた。また先生だ。よかつた。

先生がまだ腕抜こうとしてる。ボートに鼻からぶつかって口の中に
変な塊と変な味のぬるぬるした感触がした。

塊を吐き出そうとしたら木片に当たって右の口の端が切れた。

ああ、まだ水が流れてくれると思って生き、これ雨だ。

すごい雨だな。まあ一つて降つてくる。

遠くで聽こえる。

終わってもこんなに感激できるなんて、なんて素敵な演技をやり切
てもらつたんだろう。

みんなとの協調性も出て、素晴らしい学年だつてこれから一生誇り

を持つて生きていくんだ。

「これからまた中学はみんな同じだから、二年間今日の事を話し続けるのかなあ。

きっと淳君なんかは体育大学からスカウトとかもらったりするんだ
わ。野球も上手いし。

美咲ちゃんとかならテニスも習ってるし。姿勢もキレイだし。

私は高校で自慢するんだ。かっこいいんだよーって。すげかつたん
だよーって。

そうだ、写真とか撮つてくれたのかな?お父さん写真好きだから、
撮つてくれたよね。きっと。

みんなに配つてあげよ。毎年見る学校のカメラマンさん晒なかつ
たから、写真ない子もいるだわ。

へへ。

お母さんありがとー。

お父さんありがとー。

お姉ちゃんありがとー。

お祖母ちゃんありがとー。

先生、ありがとうございます。

みんなみんな、だいすきー。

へへつ。

真つ黒い視界の中に、白と青の光が目に入った。

今度はすゞじに力で水の中から身体が出て、ボートに引き上げられた。

先生だーー！

先生の顔がすゞく近付いた。やだなあ。恥ずかしいよ。

やだな、寒い。

あ、全身ずぶ濡れだよ。恥ずかしい。寒い。

遠い所でおーー、おい、おーー、って聴こえたんだけど、もう運動会も終わつたし、今朝もあんまり寝てないし、ちょっと寝てもいいでしょ。

ちょっとだけ。

また地震？何かドドドドッつて音は遠くから聴こえるんだけど、このふわふわして乗り物酔いみたいな感じは初めて。

気持ち悪くなっちゃうよ。

大きな黒い塊が学校のシェルターに襲い掛かって、シェルターがあつたハズの所が普通の水面になつていた。

高台の方のシェルター、あんなに小さかつたっけ？

先生、先生？せんせー？

頬を撫でてくれた。そんな悲しい顔初めて見たよ。トクベツトクベツ。

九月三十日

隣街の病院で目を覚ました。手を握っていたのは先生だった。眠っていた。

極度の衰弱と栄養失調、パニック障害、鼓膜の機能障害、右足首の複雑骨折。あとは擦り傷や切り傷。目玉にも傷があるらしくて、目を動かしちゃいけないんだって。

TVで世にも悲惨な物語のようにニュースやドキュメンタリー風の番組をやっていた。

当初から比較的軽傷だった翔君が県の表彰式に出席していたらしい。

私の分の賞状と楯とメダルは枕元に置いてあった。

数人、体育大学からのスカウトも例年通りあつたらしい。

私の家族は、お祖母ちゃんが発見され、後はみんな行方不明だそうだ。

葬儀や何か色々やらなきゃいけない事は全て終わつたらしい。

先生から話を聴いていると、どんどん孤独感が押し寄せてきて、涙が止まらなかつた。

先生、先生、私達の行進見てた? どうだつた?

すじかつたよ、世界でいちばん最高だった！ほら、表彰だつてされてるだろ？みんなが最高だつて思つてたんだよ！

ボーッとしていると、ガラツと乱暴にドアが開いて、隣街の親戚の叔父さんが息を切らせて立つていた。

高校一年生になつた。

あれから五年。

私は叔父さんの養子になつて、中学も、高校も隣街の学校に通つた。

叔父さんも叔母さんもすじく優しくて、お兄ちゃんも出来た。

みんなとても愛してくれる。

家族が変わつた事も、友達が変わつた事も、街がなくなつた事も。

すじく悲しかつたけど、今は幸せ。

九月十四日。

亡くなつた人達への哀悼の意と同窓会を込めて移動した小学校を数人で訪ねた。

住居用シェルターがあつた所だ。

先生も変わらず笑顔だつた。あんなにドキドキしてたのに、進学するとあっけらかんと先生の事を忘れたまま毎日を過ごした。

あのトクベツトクベツと思っていたのは何だつたんだらう。

中学生になつてから、部活が忙しくなつて先生には全く会えなくなつたけど、寂しくも何ともなかつた。

街は、私達が住んでいた地区はそのまま湖に吸收。日本でも一、二を争う透明度の遺産的なものになつていた。

観光用ボートで横断すると、私の家の屋根や陥没した道路までよく見える。

まだまに遺体が上がるらしい。

この数年で家族は全員遺体として対面した。

友達の葬儀もたまに呼ばれる。先月も行つた。

行方不明ではなくなつた事に少し無念になつた。複雑。

生きているという望みを少しでも持つていたかつた。

でも、いつまでも行方がわからぬよりもいいのかな。

眺めが全く変わってしまった校舎の窓。

小学生の時にはとてもなく大きいと思っていた総合公園は、湖の中の小さな島みたいになつっていた。

みんなは職員室で話してたけど、私は六年生の教室にいた。

先生が入ってきて、みんなの所には行かないのか?と言つて、隣の机に腰掛けた。

先生な、今年の卒業生送り出したら転校しちゃうんだ。ちょっと遠くてね。でもお仕事だから仕方ないんだ。

そつか。

先生、雪、連れてってくれるって言つてたよね。連れてつて。

うん。約束しよう。

てを握つた。

一月七日

お母さん曰く、「テーーーしてくるね」といつて、家を出た。

一人で雪山に出掛けた。スキーは持っていない。

手を繋いだ。ドキドキする。

先生の車は雪山に向かう峠道を最速で降りて行つた。

「J愛読ありがとう」「やれこおした。

本作は20th - Nov - 2011に私が見た夢がきっかけでした。
夢というのは不思議なもので、ストーリーを断片的に覚えているの
に話にしてみると矛盾だらけ。

無意識の中だからこそ私自身の本質が見えてくるのかもしれません。

ただ、夢の継ぎ田の空白部分を埋めると同時に言能的な表現や恋愛関
係の情景を描いてしまうのも私の本質かもしれません。

田覚めればありふれた日常。

xoxo

Mimoon · K · withberry

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6937y/>

鉄棒行進

2011年11月27日12時47分発行